

## こどもの



## ほめ方

## 叱り方



## ●著者プロフィール

副島 賢和 (そえじま まさかず)

昭和大学大学院保健医療学研究所准教授

昭和大学病院内病弱教育学級担当

学校心理士スーパーバイザー

東京都公立小学校教諭として25年間勤務。内8年間、品川区立清水台小学校「昭和大学病院内さいかち学級」担任。2014年4月より現職。こどもの心を和らげるユニークな授業が注目され、ドラマ『赤鼻のセンセイ』(日本テレビ/09年)のモチーフとなる。『プロフェッショナル仕事の流儀』(NHK総合/11年)にも出演。著作に『あかはなそえじ先生のひとりじゃないよ』(教育ジャーナル選書/15年)、『心が元気になる学校』(プレジデント社/16年)等。

## ほめる・叱るは何のため？

私たち大人は、子どもたちをほめたり叱ったりします。多くの方は、子どもをほめた経験、叱った経験をお持ちだと思います。そこでお聞きしたいのは、その目的です。よいことをしたから？よくないことをしたから？だれかに役に立ったから？だれかに迷惑をかけたから？このような理由ではなく、そのむこうにある「目的」です。何のために「ほめる」「叱る」をするのでしょうか。私たちは、それを明確にしておく必要があるでしょう。



## 肯定的自己イメージ・否定的自己イメージ



例えば、教師は子どもたちをたくさんほめる場面があります。教師にとって、ほめ言葉を伝えたときの子どもたちの反応は、クラスの状態を見取る大きなバロメーターです。教師のほめ言葉が、ほめ言葉として通用しているクラスは、少々にぎやかでも大丈夫だと感じます。心配だなと思うのは、教師がほめ言葉を伝えたときに、「今度は何をやらせたいの…」としらけた雰囲気があるクラスです。

ほめ言葉で伝えたいこと。それは、その子の肯定的自己イメージを膨らませることではないでしょうか。「自分は自分のままでいい」「自分は役に立つ」「自分は賢い」「自分は愛されている」「自分には仲間がいる」などと思えるように。自己イメージが肯定的なとき、子どもたちは自分の力で歩いていきます。アドラー心理学で勇気づけと言われていることに近いかもしれません。一方「自分はダメだ」「自分は無力だ」「自分は愛される価値がない」「自分はひとりぼっち」。そんな否定的なイメージを自分自身に持っている子は、ほめ言葉を素直に受け取ってくれないこともあります。私たちは、子どもたちが肯定的な自己イメージをもてるかかわりをしたいと思います。

## 受容はするけど、許容はしない

受容は、感情を受けとめること。許容は、行動を容認すること。どんな感情もしっかり受けとめますが、ダメなものはダメ、やらねばならないことはやりなさいと伝えることです。それも、「だれかに迷惑がかかるからダメ」ではなく、「最終的に傷つくのはあなただから、それをさせるわけにはいかない」と伝えます。なかなか難しいことですが、頑張りどころだと思い、努力をしています。大人がおいしいところを持っていく必要はないですよ。そして大人同士でこっそりほめ合いたいと思います。「私たち、よくやっているよね」。

